

2. アンケート及びヒアリング調査

(1) 調査の全体像

アンケート及びヒアリング調査では、雲仙温泉地域と島原半島地域の2地域を対象に、次のとおりアンケート及びヒアリング調査を実施した。

なお、調査項目や調査結果の詳細は、資料編の資料3に記載している。

表 アンケート及びヒアリングの対象地域別の調査目的と調査対象

対象地域	対象目的	調査対象
A. 雲仙温泉	地域内外の人々が魅力を感じている雲仙地域の資源、地元の人々の雲仙プラン100に対する意見やアイデアなどを幅広く収集するとともに、利用客の雲仙に対する期待や感想を把握する。またそれらから、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点などを明らかにする。	①雲仙温泉街及び温泉街周辺居住者 ②雲仙温泉街の各種事業者とそのスタッフ ③雲仙温泉街利用者・リピーター
B. 島原半島	雲仙天草国立公園雲仙地域の資源に対する意見やアイデアなどを幅広く収集するとともに、利用者の雲仙地域に対する期待や感想を把握する。またそれらから、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点などを明らかにする。	①島原半島の小中学校の教職員 ②島原半島の小中学生及び保護者 ③島原半島のキーマン ④島原半島の事業者 ⑤島原半島の体験型観光利用者 ⑥島原半島に関する専門家 ⑦長崎県観光連盟修学旅行担当者へのヒアリング

表 アンケート及びヒアリングの対象者別調査項目

対象者	主な調査項目
A-①雲仙温泉街及び温泉街周辺居住者	<ul style="list-style-type: none"> ・雲仙温泉街での暮らしについて（満足していること、大切にしたいこと、課題など） ・「雲仙温泉」という地域について（温泉街の魅力、具体的提案等） ・今後の雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域に対する全般的な意見、アイデアなど
A-②雲仙温泉街の各種事業者とそのスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・雲仙温泉の観光や観光客の特徴（雲仙の立ち寄り先等） ・接客経験の中で感じていることや対応を心掛けていること ・今後の雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域に対する全般的な意見、アイデアなど

対象者	主な調査項目
A-③雲仙温泉街利用者・リピーター	<ul style="list-style-type: none"> ・回答者の属性・旅行形態 ・来訪目的と他地域との比較 ・雲仙旅行に当たり参考にした情報源 ・雲仙の魅力とその変化 ・旅程と交通手段 ・地域内での行き先と場所別の評価 ・全体としての評価 ・今後の雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域に対する全般的な意見、アイデアなど
B-①島原半島の小中学校の教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・校外学習の内容等 ・学校行事や授業での雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域の利用 ・校外学習場所の距離的条件 ・国立公園のビジターセンターで催しているイベントや自然体験プログラムの利用
B-②島原半島の小中学生及び保護者	<p><児童・生徒への質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・住んでいる町のことについて ・雲仙温泉について <p><保護者と生徒たちが話し合っ答える質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域についての訪問経験や訪問意向 <p><保護者が答える質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域でしたいことや要望・意見
B-③島原半島のキーマン	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の現状・内容 ・活動の良い点・課題・今後の展望 ・連携やあらたな取り組みへの意向、アイデア ・島原半島の魅力的な資源・スポット・人 ・島原半島や国立公園雲仙への想い、期待、意見、アイデアなど
B-④島原半島の事業者	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所や従業員としてのまちづくり活動等への参加経験、内容、今後の参加意向、課題 ・まちづくりや、体験型プログラム、ツアー等の参加・受け入れ意向 ・島原半島の魅力的な資源・スポット・人 ・島原半島や国立公園雲仙への想い、期待、意見、アイデアなど
B-⑤島原半島の体験型観光利用者	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の島原半島内での過ごし方（主な立ち寄り場所）について ・参加した体験型活動と参加したきっかけ ・参加した活動の評価（感想、改善提案） ・島原半島の魅力、島原半島や国立公園雲仙への意見、アイデアなど
B-⑥島原半島に関する専門家	<ul style="list-style-type: none"> ・島原半島の印象、魅力 ・島原半島の魅力、資源を活かすための方法等
B-⑦長崎県観光連盟修学旅行担当者へのヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行生の動向と長崎県及び島原半島の魅力 ・島原半島や雲仙温泉街への誘客の課題

表 対象者別アンケート調査方法及び配布・回収状況

調査対象者	調査方法			回収状況 (回収率)
	アンケート用紙配布回収方法	目標 回収数	調査期間	
A-①雲仙温泉街及び温泉街周辺居住者	ワーキングメンバーが自治会総会(5自治会)に出席し、その場で配布・回収。あるいは役員に配布を依頼して回覧板等で配布し、記入後、直接回収。	100 配布数 390	2011. 3. 10～ 4. 28	194 (49.7%)
A-②雲仙温泉街の各種事業者とそのスタッフ	全事業者(計112)に直接配布し、事業者経由で配布・回収(個別には封筒に封入して回収) (民宿、商店:原則1枚/軒) (旅館、ホテル:5～10枚/軒)	100 配布数 274	2011. 2. 1 ～3. 18	173 (63.1%)
A-③雲仙温泉街利用者・リピーター	主要な集客・商業施設及び宿泊施設(計37)に設置を依頼し、施設経由で回収(各施設20部～50部) ※アンケート記入と引き替えに粗品をプレゼント	600 配布数 36施設、 各施設20～50票	2010. 11. 中旬 ～11. 2. 28	570 (-) ※正確な配布数がわからないため不明
B-①島原半島の小中学校の教職員	雲仙市、島原市、南島原市の各校長会で配布し、各校から郵送で回収(全小中学校82校教職員:1～3名/校) (旧市町ごとに小中学校1校計35校の各1クラスの生徒・保護者:小学5年生500名、中学2年生500名)	170 配布数 171	2011. 2. 1 ～2. 14	165 (96.5%)
B-②島原半島の小中学生及び保護者		1000 配布数 1049		920 (87.7%) (学校単位では100%)
B-③島原半島のキーマン	アンケート用紙を郵送により配布・回収(依頼状添付)	20 配布数 108	2011. 8～9	19 (17.6%)
B-④島原半島の事業者	各種関係団体(JA島原雲仙、島原地方酪農業協同組合、ながさき南部生産組合)、にお願いし、参加団体・個人へアンケート用紙を配布、まとめて回収をいただく。商工業者については個別に郵送・回収。	20 配布数 154		20 (13.0%)
B-⑤島原半島の体験型観光利用者	配布:体験プログラムなど新たなタイプの観光を提供する関連施設・事業者から、その施設等への来訪者にアンケート用紙を配布。 回収:配布者による回収(その場で参加者に記入いただき特典として湯せんぺいを進呈)後日、まとめて事務局に郵送。	100 配布数 約100		92 (92.0%)
B-⑥半島原島に 関係する専門家等	アンケート用紙を郵送により配布・回収(依頼状添付)	20 配布数 45		33 (73.3%)

(2) 雲仙地域アンケート・ヒアリング調査結果（概要）

1) A-①雲仙温泉街居住者対象

対象者	雲仙温泉街の居住者（5自治会）
調査目的	雲仙での暮らしや観光、まちづくりに対する感想、意見をうかがい、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点、アイデアなど明らかにする。

■回収状況

- ・回収数 194 票（回収率 49.7%）

■回答者の属性

- ・年齢：70代が最も多く、60代以上で約半数を占める。30代以下は2割に満たない。
- ・性別：女性の割合が56%とやや高い。
- ・職業：会社員・公務員・団体職員で合わせて29%、自営業が22%、無職24%、専業主婦8%。
- ・出身地：雲仙温泉以外の出身者が60%。

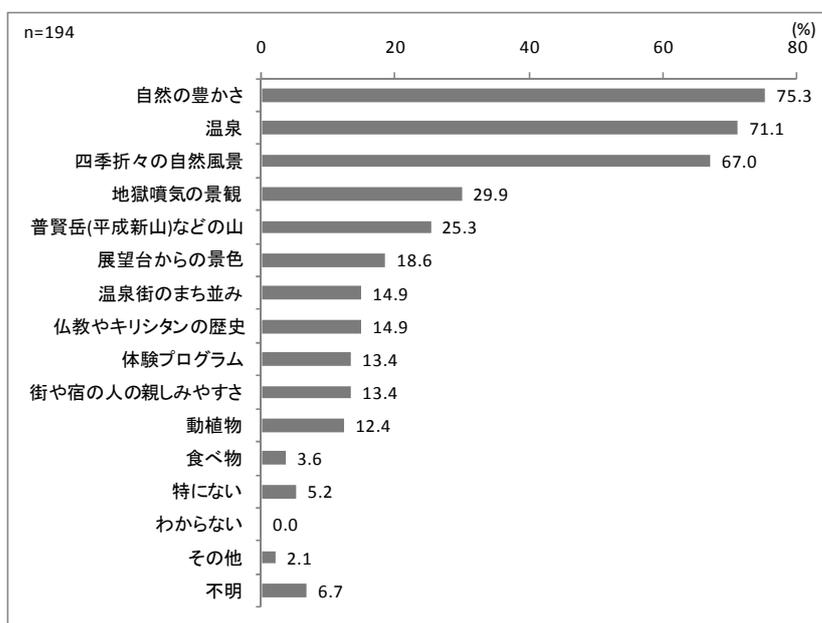
■回答のまとめ

- ・4割以上の方が、雲仙温泉での暮らしに「満足」「まあ満足」。特に、「自然」と「温泉」に満足。
- ・雲仙の暮らしをよくする上での課題としては、病院・薬局などの医療関係、日常雑貨を買うための小売店の充実を求める声が多かった。
- ・雲仙の楽しみは、「自然」に関するもので、「四季の美しさ」「雪が楽しみ」「落ち葉の道を歩く楽しさ」など、日々の暮らしの中で自然を楽しんでいる様子がうかがえた。また、温泉が身近にあって「いつでも温泉に入れる」こと、「温泉が友人との交流の場となっていてストレス解消になる」という声もあった。
- ・雲仙で大切にしたいことは、「豊かな自然」という意見が多くみられたほか、「観光客とのふれあい」や「地域の

つながり」を大事にしたいという回答も複数あった。

- ・回答者の7割が、雲仙を「大好き」「まあ好き」と回答。
- ・雲仙温泉に住む人のお気に入りの場所は、「雲仙地獄」が1位、「仁田峠」が2位で、観光客にも人気のスポットが上位を占めてい

図 住民が思う雲仙温泉の魅力（複数回答）



る。一方、3位と4位は「宝原園地」「白雲の池」となっており、観光客の回答（下位）とは違う傾向がみられる。

- ・ **住民が思う雲仙温泉の魅力**は、「自然の豊かさ」「温泉」「四季折々の自然風景」が突出して高く、それぞれを回答者の7割前後が挙げている（複数回答）。「食べ物」を挙げる人は少ない。
- ・ **今後増やしたいイベント**としては、「観光客と地元住民の両方が楽しめるイベント」という回答が半数を超えた。また、何年も継続してできるイベントを望むという意見が多かった。具体的には、花火大会や、「はだしで遊ぼう」に関するもの（回数を増やす）、朝市、バザー、野外コンサート、物産展、スタンプラリーなどの提案があった。
- ・ 自由回答では、「イベント告知が十分でなく、地元住民が知らないことが多い」という意見がみられた。
- ・ **雲仙温泉に観光客を増やす**には、施設や街並みに関する意見が最も多く、ついでサービスの充実やPRの強化という声が多かった。（以下に具体的な項目を列挙）
 - ・ 街並み：「景観を美しく」との意見が多くみられた。
 - ・ 施設：「スポーツのできる施設を整備してスポーツ合宿の誘致」、「子ども向けの遊び場」や、「飲食店の充実」、「コンビニ」、「薬局」などを求める意見が見られた。また、観光客が少ない梅雨期のために「アジサイ園」を作るといった提案のほか、ツツジや原生沼のカキツバタを増やすなど、花木による魅力づくりを提案する回答が複数あった。
 - ・ サービス：高齢者向けのプランや体験プログラムの充実、雲仙ブランドの開発、もてなしの充実などが必要という意見があった。
 - ・ テレビやインターネットによるPRをとの意見がみられた。
 - ・ 交通：「駐車場の料金を安く」や「福岡との定期バスや空港からのアクセス道路の建設」を求める意見があった。仁田峠への交通については、春・秋の混雑解消や冬場の通行止めの改善を求める声があった。
- ・ **観光地としてのまちづくりをしていく上での課題**としては、魅力的な観光施設の整備、特に子ども向けの遊び場や、ゆっくり楽しめる施設をつくるべきだという意見が多く、交通の便の悪さについては暮らしと観光地としての両面から課題として指摘するものが多かった。
- ・ **将来のために雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域、島原半島などで活用すべきもの**としては、ツツジ、九州自然歩道、普賢岳などの観光資源や、冬の景色の美しさ、雲仙市の特産品のほか、満明寺、「さるふあ」のような自然を紹介する取り組み、仁田峠、地獄、若い人の考えと行動力が挙げられた。
- ・ **雲仙温泉のまちづくりや観光の課題**としては、自然を大切にしながら美しいまちづくりをすることや、人を呼ぶための魅力的な施設整備やイベント開催を課題とする意見が多くみられた。また、3市が連携して、観光主体の一本化や面としての情報発信をすべきだという意見が複数みられた。

- ・PRのポイントとしては、自然だけでなく文化的なものの掘り起こし、気軽に立ち寄れる雰囲気作り、癒しの場としてのアピール、冬の景色の美しさをもっと活用すべき、という意見があった。
- ・その他として、「色々な行事を一部の人がだけで進めている」という意見がある一方、「一生懸命取り組んでいる人たちと無関心な人の差が大きい」、「住民がこぞって参加できる意見交換の場が必要だ」という意見がみられた。

2) A-②事業者・スタッフ対象

対象者	雲仙温泉の接客スタッフ（旅館・ホテルについては接客にかかわる従業員、飲食店・小売店等については事業主）
調査目的	観光客との接触や自らの経験を通じて得た雲仙に対する感想や意見から、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点、アイデアなど把握する。

■回収状況

- ・回収数 173 票（回収率 63.1%）

■回答者の属性

- ・20代が25%、50代21%、60代以上23%、女性の割合が60%とやや高い。雲仙温泉内の居住者が62%、雲仙温泉以外の出身が71%を占める。
- ・宿泊業従事者が半数を超え、職種ではフロント、客室係を合わせると4割以上。
- ・雲仙温泉での勤務年数は約半数が10年以下（うち1年以下が16%）。20年以上勤務は、2割。平均は13.8年。

■回答のまとめ

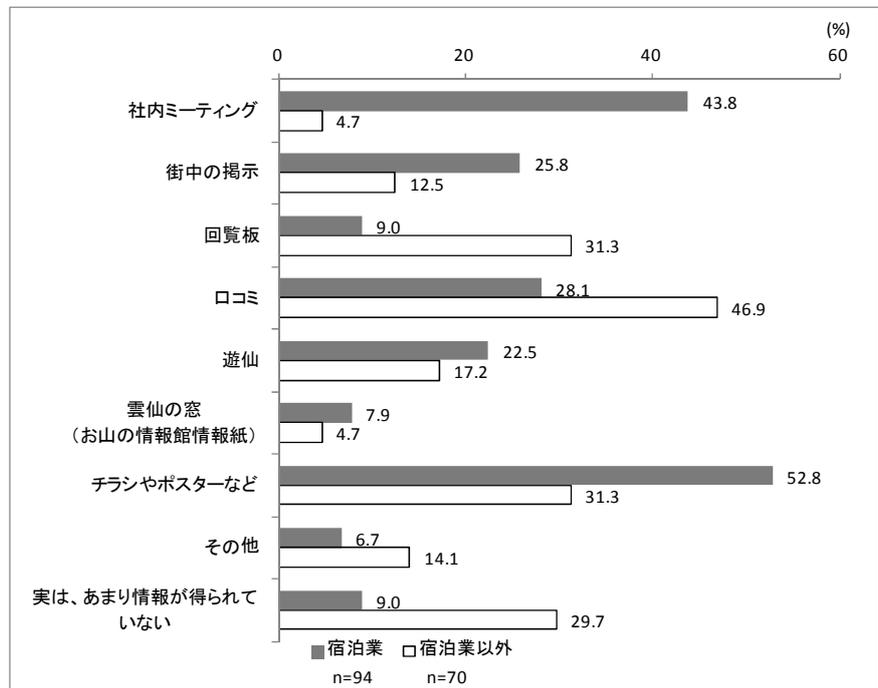
- ・**観光客によく聞かれる三大観光スポット**は「地獄」「仁田峠」「温泉」。
- ・**聞かれて答える雲仙温泉の三大名物**は「湯せんぺい」「地獄」「温泉たまご」。ともに雲仙の温泉、地獄と深く結びついたものという共通点がある。
- ・観光客の**良い印象**は「温泉」「自然・風景」。周辺の自然の美しさ、静けさ等も高く評価。
- ・**要望・苦言**は「昔に比べ街に活気がない」ことや「コンビニや夜に飲食できる店がない」こと、「地獄以外の観光スポットがない」と答えており、他の資源の魅力が伝わっていないことが示唆された。
- ・**雲仙温泉に関する情報の入手先**は、宿泊業は「チラシやポスター」「社内ミーティング」が多く挙げられているが、宿泊業以外では3割が「実はあまり情報が得られていない」と答えており、情報共有や収集方法に問題があることが示唆された。

- ・**集客のためには**「観光客に雲仙らしさを感じてもらうための街並み・雰囲気整備」とそれを支える「地域住民全員でおもてなし」が重要で、そのためのイベント等の**情報共有**、**自然環境の保全整備**、**情報交換・意見交換の**

場の整備、**島原半島との連携強化**などが必要、ボランティアガイド普及や街の**外国語対応**を含めた案内板等の整備、**観光案内所のサービス充実**、交通アクセスの向上等を進めたいなどの意見が多くみられた。

- ・また、**島原半島で注目すべき団体・取り組みや連携先**として、**島原半島観光連盟**、**がまだすネット**、**各市観光協会**等が挙げられた。

図 雲仙に関する情報の入手先（業種別）



3) A-③利用者やリピーター対象

対象者	雲仙温泉街のリピーターや利用者
調査目的	雲仙温泉の利用者やリピーターの方の雲仙に対する期待や感想、意見から、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点、アイデアなど把握する。

■回収状況

- ・回収数 570 票

■回答者の属性

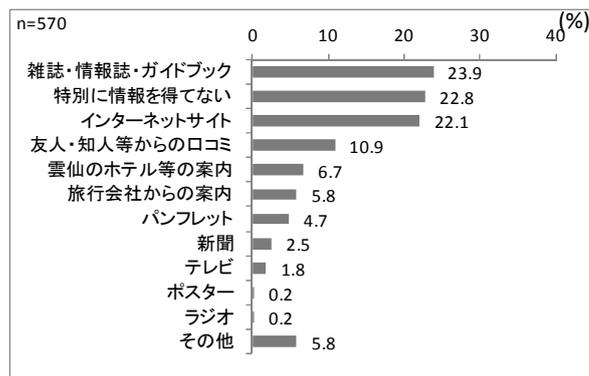
- ・やや女性が多く、年齢は50歳代、60歳代が各17%と多い。職業は会社員などの勤め人が約6割。
- ・雲仙への来訪経験は、「初めて」が28%、2～4回目が32%、5回目以上が22%。「5回目以上」の半数強は、長崎県内の居住者である。

■回答のまとめ

- ・**雲仙温泉への来訪客の目的**は、「**温泉入浴**」を来訪の目的とする人が7割を超え、「**癒し・休養**」が5割弱、次いで「**風景鑑賞**」が3割弱である。
- ・旅行先を決める際に比較した地域がある人が25%あり、**比較の対象**は**小浜**のほか、**別府**など九州の温泉地が多い。旅行先を**雲仙にした決め手**も、「**温泉**」が群を抜いて多い。

- ・ **計画段階での情報入手先**は、「雑誌・情報誌・ガイドブック」が24%と最も多く、次いで「特別に情報を得ていない」、「インターネットサイト」はともに22%であった。

図 計画段階での情報の入手先（複数回答）



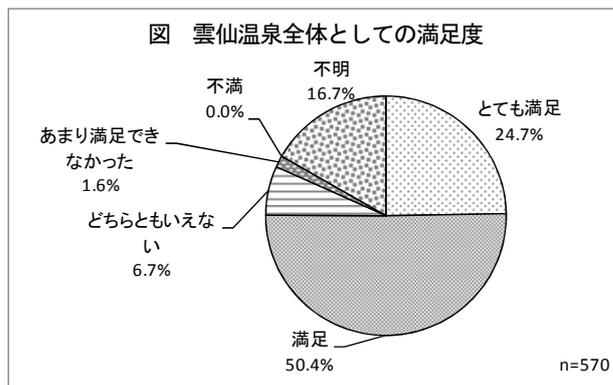
- ・ 初めての来訪客の場合、来る前に楽しみにしていたことは多くが「温泉」で、実際に「期待以上」とする人が30%と満足度も高い。また、「**期待していなかったが来てみて感じた雲仙の魅力**」で多いのは、「地獄噴気の景観」であった。

- ・ **リピーターにとっての雲仙の一番の魅力**は「温泉」が多いが、「自然の豊かさ」「四季折々の自然風景」を挙げる人も比較的多い。

- ・ **宿泊数**は、大半が雲仙温泉では1泊のみで、雲仙以外に宿泊地がある場合、長崎泊が約4割。

- ・ **雲仙温泉への入りと出との方向**が違う旅行者がかなりの割合にのぼっており、雲仙温泉は広域周遊観光の中継地としての位置にある。前後の立寄り観光地としては、長崎市内方面、ハウステンボス方面が多いが、熊本・大分方面も比較的多い。

- ・ **雲仙温泉全体としての満足度**は、「とても満足」、「満足」を合わせて75%と高い満足度といえる。しかし、この高い満足度に対し雲仙温泉への観光客が伸びていないことは、雲仙自体の知名度の低下やブランドイメージが希薄であることによって、雲仙が旅行先の候補としてあがらないことや候補にあがっても「どうしても雲仙に行ってみよう」と思わせることができていないことに起因すると考えられ、戦略的に訴求力の高い情報を発信していくことが重要であることが示唆された。



- ・ **全体として良かった点**として、「泉質」を挙げるものが最も多く、「自然景観や風景」、「静けさ」などを評価する人も多い。**悪かった点**としては、「街の中に見どころがない」、「施設が老朽化している」など、施設や街並みに関するものが多いほか、「交通アクセスの問題」を指摘するものが多くみられた。

- ・ そして、**雲仙を良くするアイデア**として200件を超える回答があり、3割が交通アクセスの問題に対する提案で、博多駅や長崎駅、長崎空港、港などとの「交通アクセスの改善」のほか、「域内交通手段の整備」については、複数の方から「雲仙散策のための無料巡回バス運行」、「雲仙温泉街の移動手段として人力車の導入」、「花ぼうろの時期の仁田峠への通行許可」といった提案や要望が寄せられた。次いで多い意見が、「島原半島の地元の海、山の産物を用いた土産物や名物料理の提供」「雲仙地獄ならではの地獄蒸プリン」「温泉卵をもっと買いやすく」といった、「土産物・料理に関するもの」や湯めぐりなどのサービス、「雲仙をテーマにした写真・絵画コンテスト、バンドコンテスト」「子供が楽しめるイベント」などイベント開催に関するものが約2割だった。

(3) 島原半島アンケート調査結果（概要）

1) B-①島原半島の教職員対象

対象者	島原半島内の全公立小中学校の教職員
調査目的	雲仙天草国立公園雲仙地域の資源に対する意見やアイデアなどを幅広く収集するとともに、利用者の雲仙地域に対する期待や感想を把握する。またそれらから、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点などを明らかにする。

■回収状況

- ・79校（回収率96.3%）から165人分（同96.5%）

■回答者の属性

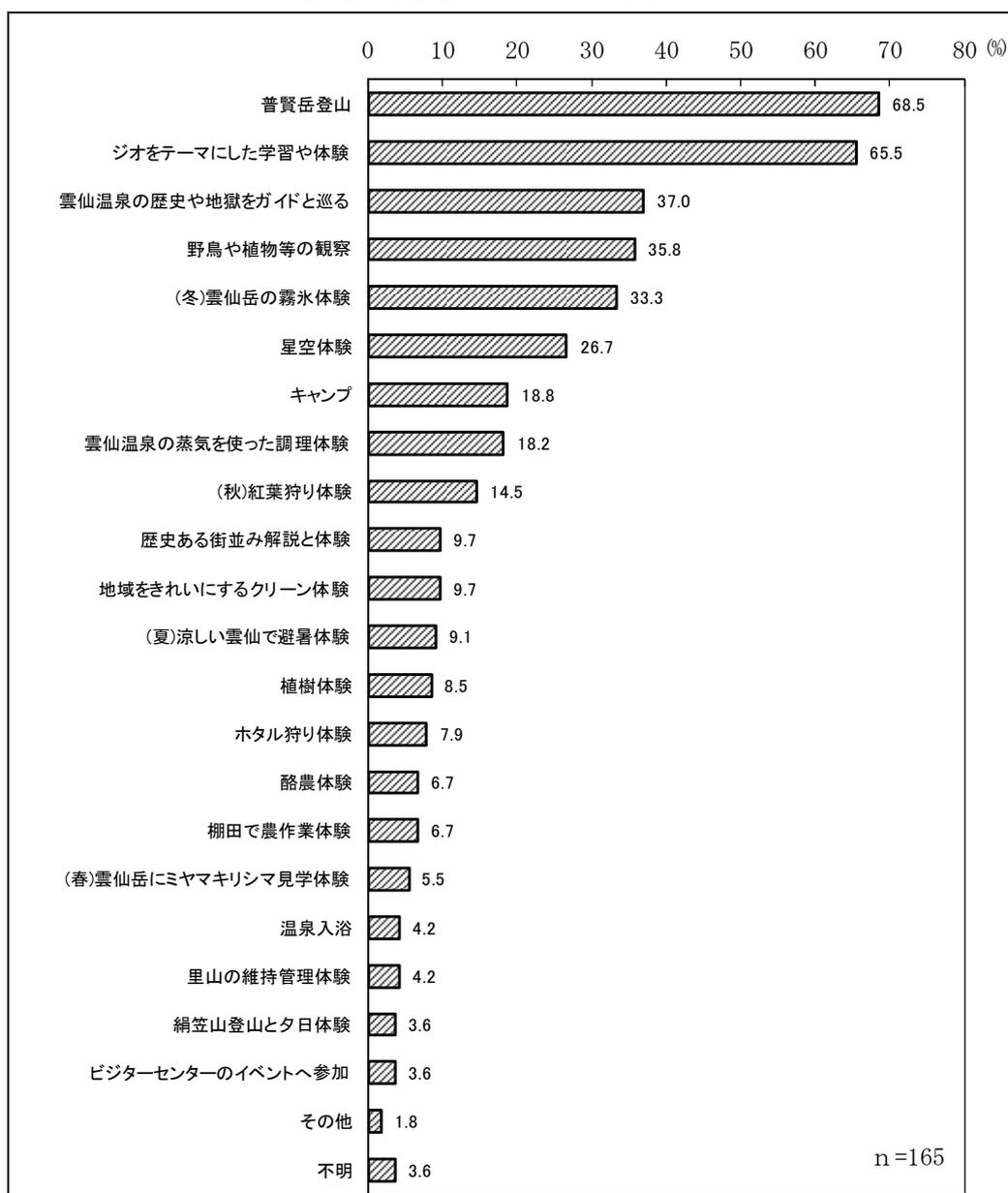
- ・小学校72%、中学校28%。学校所在地は、雲仙市33%、島原市25%、南島原市42%。
- ・一般の教員が約6割、管理職が約4割。島原半島内での勤務年数は平均16.2年。

■回答のまとめ

- ・**校外学習**は、小学校では90%以上が「自然体験」を実施。中学校では「自然体験」、「一次産業体験」が比較的多い。今後は「科学体験」、「歴史文化体験」、「一次産業体験」を実施したいとする先生が多い。
- ・**学校行事や授業での雲仙の利用**は、小学校では70%、中学校では約半数。利用目的は、小学校では「遠足」、中学校では「登山・ハイキング」が多い。「自然観察や自然体験」は小・中学校とも3割程度。利用場所は「普賢岳」、「仁田峠」に集中。**子どもたちの興味**は「動植物とのふれあい」、「自然の美しさ、四季の変化、雄大さ」が各21%、「山頂からの眺め、景色の良さ」が17%が多い。
- ・**雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域を利用しない、あるいは検討したこともない最大の理由**は、「予算」が65%と最も多く、3市のなかでも南島原市では「予算」を理由とする回答割合が85%と最も高く雲仙に遠いことが影響しているものと思われる。「情報不足」、「学校の方針」との理由は比較的小さい。「その他」として距離が遠いという指摘がみられた。実際に校外学習でバスを使用する場合は、時間的限度は片道40分以内とする先生が3分の2程度と多い。
- ・**学校やサークルでのビジターセンターの活用**は3分の1にとどまり、利用施設は、小学校では「諏訪の池ビジターセンター・キャンプ場」が約8割と圧倒的に多く、中学校では「諏訪の池」と「平成新山ネイチャーセンター」、「雲仙お山の情報館・白雲の池キャンプ場」が各約4割。
- ・**施設利用者が高く評価**したのは、染め物（諏訪の池ビジターセンター）や炭作り（エコパーク論所原）などの学校では普段体験できないプログラム。**改善点や要望**は、施設の存在感や活気、モデルプランや指導計画の提示など。

- ・ 国立公園内のビジターセンターを学校やサークルなどで利用したことがない先生（全体の66%）の9割が、「利用について検討をしていない」と回答。理由は、「予算」のほか、「ビジターセンターのイベントやプログラムの情報がなかった」も約3分の1と多くみられた。
- ・ 子どもたちに参加させてみたい体験プログラムとして、「普賢岳登山」と並んで「ジオをテーマにした学習や体験」がとくに多い。
- ・ 雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域全般で必要と感じる機能や施設、体験プログラムやサービスに対しては、半数近くの先生から「事業時間数が限られる学校向けの配慮（学校教育として扱いやすいジオと関連付けたプログラム開発、出前講座の実施等）」に関して意見が出された。その他、下から上れるシャトルバスの運行や安価な送迎バスなど交通手段の確保を求める意見が約2割と多くみられた。また、体験プログラムについては、温泉の利用や避暑地の歴史を伝える取り組み、観光客との交流など雲仙らしいプログラムの提供を求める意見もみられた。

図 参加させたいプログラム（5項目以内）



2) B-②島原半島の小中学生対象

対象者	島原半島内3市の小学校5年生と中学校2年生の児童生徒及び保護者
調査目的	雲仙天草国立公園雲仙地域の資源に対する意見やアイデアなどを幅広く収集するとともに、利用者の雲仙地域に対する期待や感想を把握する。またそれらから、今後の雲仙地域を考える上で踏まえるべき視点などを明らかにする。

■回収状況

- ・35校（回収率100%）から920人分（同87.7%）

■回答者の属性

- ・性別は、男・女ほぼ半々。中学生と小学生はほぼ半々（中学生52%、小学生48%）で、中学生は全員中学2年生、小学生は1クラス分以外全員5年生。
- ・島原半島に住んでいる年数は、「生まれてからずっと」が7割近くを占める。

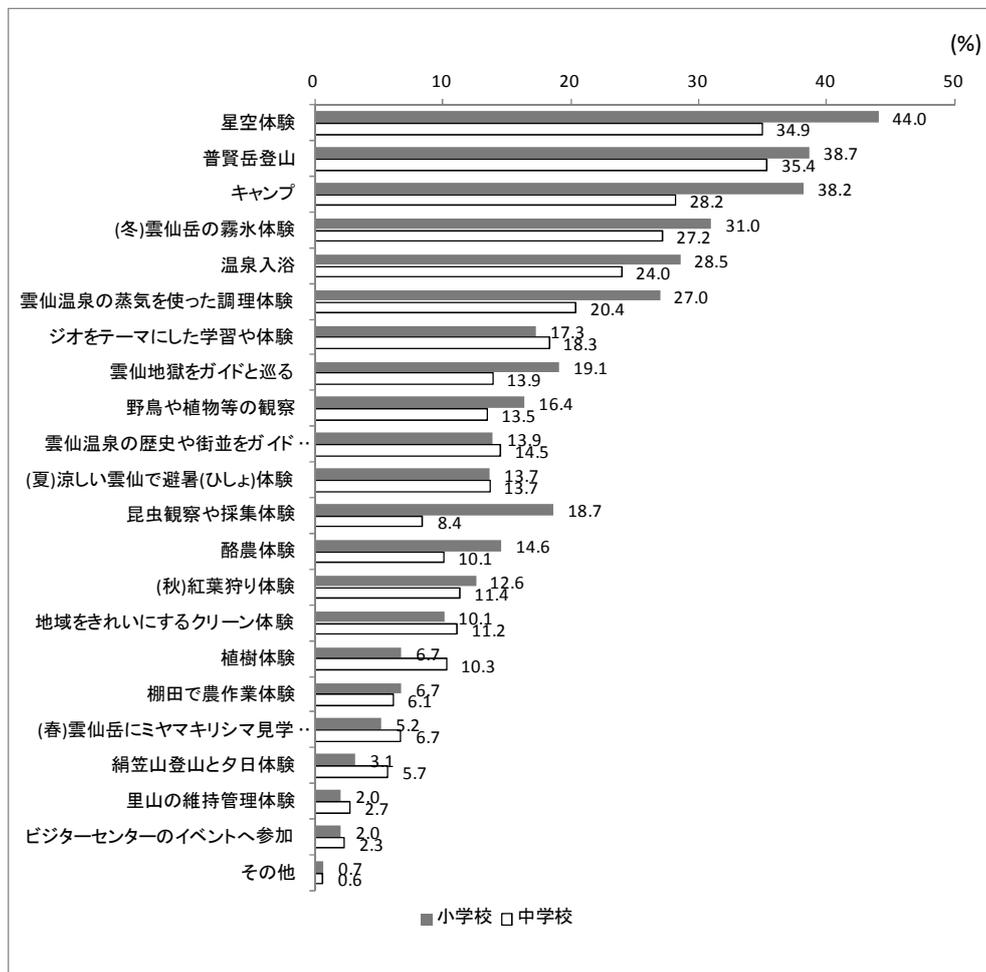
■回答のまとめ

- ・（子ども）子どもたちが考える、**住んでいる町の自慢**は、「森や海などの豊かな自然」、「地元でとれる食べ物がおいしい」を挙げる子どもたちが多し。また、好きな場所としては、海、牧場、池、川、山等の「自然の多いところ」や、「遊び場・公園等」という答えが多く、街なかや屋内よりも、自然に触れたり体を動かして遊べる場所が好きという子どもたちが多し。
- ・（子ども）**雲仙温泉・雲仙天草国立公園雲仙地域についての認識**は、「自然豊か」、「自然とふれあえる場所」、「温泉」、との認識が多く、遠くに住む友達を「温泉（おフロ）」（38%）や「雲仙地獄」（27%）に連れていきたいと考えている子どもが多い。また、**雲仙について知っていること**（複数回答）は、多い順に「普賢岳」（82%）、「雲仙地獄」（79%）、「温泉たまご」（76%）、「温泉（おフロ）」（72%）、「平成新山」（65%）、「湯せんぺい」（62%）。普賢岳、平成新山といった「山」のほか、雲仙温泉ならではの産物の知名度が高い。
- ・（子ども+保護者）**雲仙温泉への来訪経験**について、全体では74%が行ったことが「ある」としていたが、これは、4人に1人は行ったことがないことになる。訪問経験のある者のうち6割前後が「日帰り温泉入浴」や「ドライブ」を目的としてあげている。**家族で行ったことのある場所**（複数回答）としては、「百花台公園」との回答が約8割と最も多く、「雲仙地獄巡り」、「雲仙温泉」、「仁田峠」と続き、「諏訪の池・休暇村」も65%と比較的多し。「旅館・ホテル」は4割程度で、「旅館やホテルは高級というイメージがあり、地元の住民は宿泊しにくい」との声もある。
- ・（子ども+保護者）**もっと子供と雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域に行くために、あるとよい施設、サービス、プログラム**としては、回答者の半数を超える463名から意見が寄せられ、分類すると、「遊べるところを増やす」という意見が53%と最も多く、次いで「温泉施設やサービスの充実」、「イベントを増やす」、「商業施設を増やす」が約10%、「体験プログラムやツアーを行う」が5%みられた。子どもが遊べる施設としては、遊園地や動物園のほかに公園に遊具が欲しいという要望が多い。また、子どもたちからも、子どもが遊べる温泉が欲しいという声も

出ている。その他、駐車場については料金が高く数が少ない、場所がわかりにくい、雲仙についての情報が不足しているなどの意見もみられた。雲仙に人を呼ぶためのアイデアとして、訪れるきっかけになるイベントや体験プログラムを行う、土産物を増やすなどが提案された。

- ・（保護者）これから雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域で子どもたちに体験させたいこと（下図）は、星空体験や普賢岳登山、キャンプが3割を超え、小・中学校を比較して差が顕著なのは、小学生保護者は「星空体験」「キャンプ」「雲仙温泉の蒸気を使った調理体験」「昆虫観察や採集体験」が多く、中学生保護者は「ジオをテーマにした学習や体験」「地球をきれいにするクリーン体験」「植樹体験」などが多くなっている。

図 雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域で子どもたちに体験させたいこと（5項目以内）



- ・（保護者）雲仙温泉や雲仙天草国立公園雲仙地域についての意見・要望では、家族で休める場所や施設、体験プログラムが欲しい、地元の人が行きやすくなるような宿泊施設や入浴料の割引サービスなどの工夫があるとよいなど、雲仙温泉・雲仙天草国立公園雲仙地域にはもっと地元を意識してほしいという意見が多くみられた。

3) B-③島原半島のキーマン対象

対象者	<ul style="list-style-type: none"> ・島原半島内でまちづくりを行っている人 ・体験プログラムやツアーの受け入れを行っている酪農林漁業者、商工業者等 ・各種活動団体代表者 (以上、平成21年度環境省調査でスタアアップされた方から抽出) <ul style="list-style-type: none"> ・南島原の民泊受け入れ者&がまだすネット登録者
調査目的	島原半島内で地域づくりを行っている人や、あたらしい取り組み、興味深い取り組みをしている団体や人を対象に、具体的な活動内容や今後の連携した取り組みへの意向・アイデアを把握するとともに、島原半島や国立公園雲仙への想い、意見、提案、アイデアなどについて明らかにし、今後の連携やビジョンづくりの参考とする。

■回収状況

- ・回収数 19票 (回収率 17.6%)

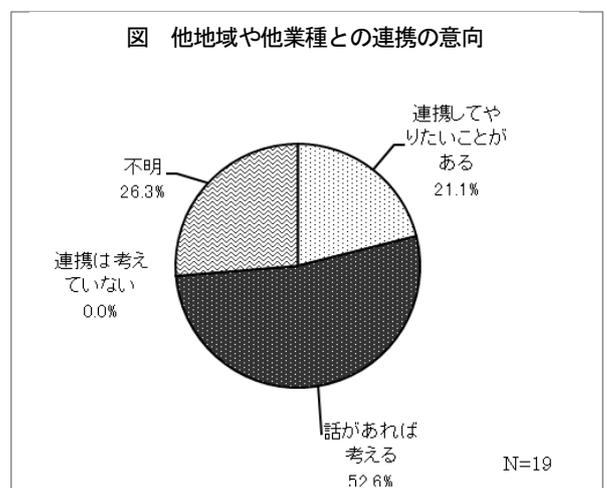
■回答者の属性

- ・自然保全活動や歴史や文化の保全活動、体験ツアーやプログラムへの協力をされている方が比較的多い。
- ・12名 (63%) が南島原市、8名 (42%) が島原市で活動をされている方。

■回答のまとめ

- ・**半島での活動上の問題・課題**は、「地域の多様な資源をゆっくり楽しめる施設や民宿、体験プログラム等、受入れ体制の不足」、「情報発信不足、対外交流不足」など
- ・活動において**島原半島が活かされているか**については、半数近くが「大いにもしくは少しは活かされている」とし、ジオ (半島全体の地形・地質、温泉・湧水、ジオツーリズム等) や自然や景観の美しさ、有機農業による安心・安全な農産物が活かされていると回答。
- ・活動において**国立公園が活かされているか**については、半数を超える回答者が「大いにもしくは少しは活かされている」とし、ジオや保全された自然、国立公園であること自体 (連携のとりやすさや誇りの醸成など) が活かされていると回答。一方で、「活かされていない」も4割で、活かすためには「保護から活用への意識の転換」、「市、県、観光協会の後援」が必要という回答もみられた。

- ・**他地域や他業種との連携**については、約2割が「連携してやりたいことがある」と回答 (右図)。連携対象は、島原半島ジオパーク推進連絡協議会、商工会、JA、観光ガイドなどで、ジオパークの推進や郷土料理の提供、ジオ関連のお土産品開発、半島の観光ガイドの定期的交流・研修といった提案がみられた。「話があれば考える」も半数を超えた。
- ・地域づくりや観光に活かせる**島原半島の魅力、もの、人やその活かし方**として、「地域の中での交



流や地域のことを知る機会の創出」、「半島の統一的なブランドとしてジオパークを活用」、「半島観光のコーディネート組織構築等による推進体制の強化」、「自然の美しさ、産物の美味しさを素材にした食の開発・提供」、「半島めぐりの開発・拡大」、「半島周遊コースの設定、民泊、体験、学習など特徴をもつ観光拠点を設置」、「市民と観光客が交流する場の設置」、「農業、水産業、観光業が連携した島原半島のアピール」、「3市や官民一体となった取組」などがあげられた。また、地域づくり活動の継続には達成感（成功体験）も必要との回答もみられた。

4) B-④島原半島の事業者対象

対象者	B-③以外の、島原半島内の酪農林漁業者、商工業者等（将来的に、各種ツアーや体験プログラムの実施において協力いただきたい事業者）
調査目的	島原半島内の酪農林漁業者、商工業者等を中心に、地域づくり活動等への参加意向、何ができるか、半島や国立公園雲仙への想い、意見、提案、アイデアなどについて把握し、今後の連携やビジョンづくりの参考とする。

■回収状況

- ・回収数 20 票（回収率 13.0%）

■回答者の属性

- ・ 8 事業者が島原市、9 事業者が南島原市、3 事業者が雲仙市に所在。
- ・ 農畜産業が 8 事業者（乳製品）、林業が 1 事業者（まな板）、製造業が 10 事業者（かまぼこ、味噌、醤油、素麺）、その他 1 事業者（風呂敷、和手など）。
- ・ 8 割（16 事業者）が、環境保全活動や体験プログラムへの協力などを行っている。

■回答のまとめ

- ・ **事業所で活かしたい、あるいは活かせると思う島原半島の魅力や資源**は、「ジオパーク認定、ジオとの連携」、「半島で生産された食材」、「海や夕日の景色」、「キリシタン復活」、「お年寄り」、「島原半島の産品を取り扱う直売所」、「体験学習、食育の場」、などがあげられた。
- ・ **国立公園を活かすためのアイデアや国立公園に求めること**として、「子どもたちへの国立公園への理解促進」、「国立公園を身近に体感できるもの」、「食糧自給率の高さや食の安全・安心をテーマに半島一体となった取り組み」、「他県からの来訪者に島原のお薦めとして紹介できるような話題性」といった回答がみられた。

5) B-⑤島原半島の体験型観光利用者対象

対象者	・体験型プログラムやツアー、民泊利用者など新しいタイプの観光の利用者 (加津佐イルカウォッチング、さるふぁ、雲仙市観光ガイド協会、有馬つんなも会、原城跡観光ガイドの会、原城跡観光ガイドの会、島原観光ボランティアガイド参加者)
調査目的	体験型プログラムやツアー、民泊利用者など新しいタイプの観光の利用者を対象に、半島内での活動や過ごし方の実態(訪問先や活動内容)、島原半島を選んだ理由、半島の魅力、改善点などについてお聞きし、今後の連携やビジョンづくりの参考とする。

■回収状況

- ・回収数 92 票 (回収率約 92.0%)

■回答者の属性

- ・男性 28 名 (30%)、女性 62 名 (67%)。
- ・20 代以下 : 25%、30 代 : 16%、40 代 : 25%、50 代 : 17%、60 代以上 : 15%
- ・会社員 : 46%、パート・アルバイト : 14%、専業主婦 : 11%、学生 : 8%、公務員 : 5%、その他 : 8%
- ・住まいは北海道・東北 : 3%、関東・甲信越 : 26%、中部・北陸 : 1%、近畿・中国・四国 : 14%、島原半島 : 0%、島原以外の長崎県 : 15%、長崎県以外の九州・沖縄 : 36%
- ・参加した体験型活動は「イルカウォッチング」が最も多く 21% (19 名)、次いで「自然観察会」が 15%、「史跡めぐりツアー」が 10%、「地域の祭りへの参加」(7.6%)。
- ・初来訪者と再来訪者の割合は半々で、再来訪者の来訪回数平均は 5 回と多い。

■回答のまとめ

- ・旅行形態は「個人手配の旅行」が 7 割強と多数を占める。

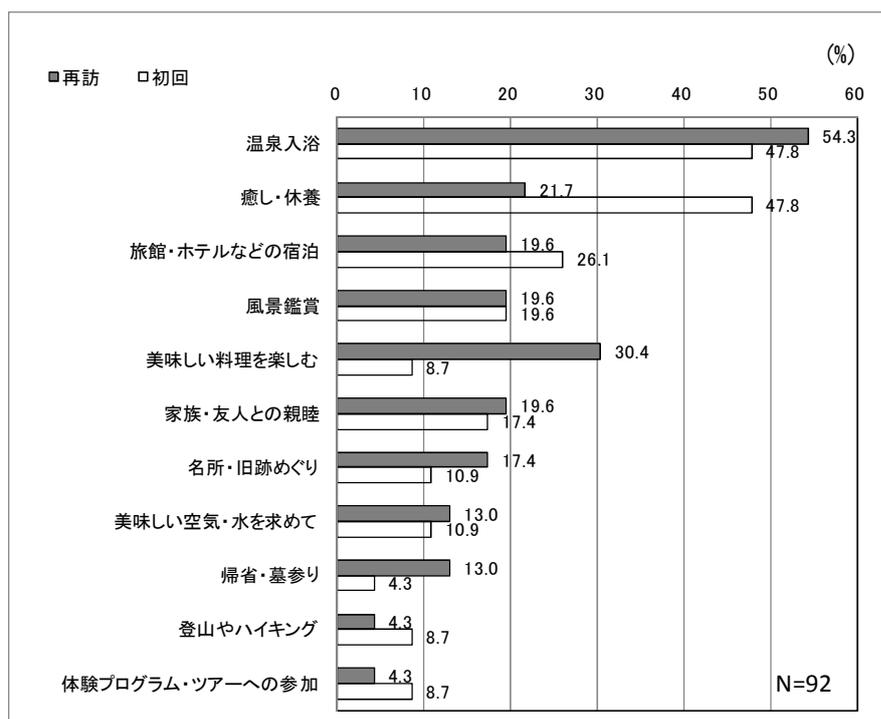
- ・同行者は「家族」が 37% と最多、「夫婦のみ」、「友人知人」が各 25%。

- ・島原半島での滞在期間は 1 泊が半数以上を占め、1 日以下(半日以下と丸 1 日をあわせた人)が 3 割強。2 泊以上は 1 割以下と少数。

- ・来訪目的は「温泉入浴」「癒し・休養」「旅館ホテルなどの宿泊」が順に上位 3 位を占め、「温泉入浴」が半数を超える。

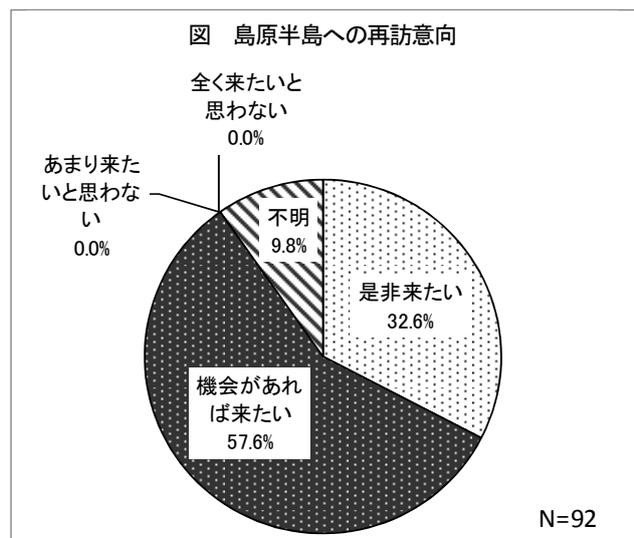
- ・**来訪目的を再訪の方と初めて島原半島に訪れた方で比**

図 島原半島への来訪目的 (3 つまで○)



較すると、「温泉入浴」は再訪、初回に関係なく約半数が目的としてあげているが、特徴的な傾向としては、初回は「癒し・休養」を目的に来訪し、再訪では「癒し・休養」よりも「美味しい料理を楽しむ」を目的の上位にあげる方が多くなっている。初回に訪れる人には、「美味しい料理が味わえる」という地域のイメージが弱いともいえ、温泉と“食”をセットにするなどしてアピールすることで、より多くの方の島原半島への関心を高めることができるといえる。

- ・**体験型活動に参加したきっかけ**は「なんとなく楽しそうだったので」が3割近く、「普通に観光しただけではできない体験だと思ったから」が2割を超えた。「楽しそう」「なかなか体験できない」といった魅力が利用者を惹きつけていることが伺える。
- ・**体験型活動の情報源**は「雑誌・情報誌・ガイドブック」「友人・知人等の口コミ」「インターネット」の順で上位3位を占める。インターネットよりも口コミ情報が上位にあり、また、インターネットでの情報発信の余地が多分にあるといえる。
- ・体験型活動で特に**よかった活動**は「地獄のナイトツアー（5人）」「イルカウォッチング（4人）」「夏祭り（4人）」が順に上位3位を占める。特に「地獄のナイトツアー」は昼間の地獄とは違った神秘性や星空についての言及があり、昼間の地獄ツアーよりも評価する利用者もみられた。
- ・体験型活動の改善点についての自由回答は回答数が4件と少ないものの、うち2件はトイレに関する記述（水洗トイレ・公衆トイレの整備）。
(島原半島や国立公園に対する想い、意見、アイデア)
- ・雲仙が国立公園に指定されていることを知っている利用者は全体の約3/4。
- ・**国立公園での体験型活動**について、「魅力を感じる」との回答は全体の4割強、「魅力を感じない」は2割強。不明（未回答）が全体の3割強と比較的多い。
- ・体験型活動に**魅力を感じる理由**は「自然と触れ合うこと」「豊かな自然」など雲仙の自然についてのほか、「普段できない」や「ここでしかできないこと」を体験できることへの言及も見られる。逆に、**魅力を感じない理由**は「どのような活動をしているのかわからない」との回答が半数以上を占めており、利用者に対する情報発信が不足している可能性が高いといえる。
- ・**島原半島への再訪意向**は、「来たい（是非来たい+機会があれば来たい）」との回答は全体の9割以上を占め、再訪意向が強い。



6) B-⑥島原半島外専門家対象

対象者	島原半島外の専門家など（芸術家、TV局ディレクター、雑誌社担当、旅行エージェント、地域づくり専門家、半島の地域活動家、世界ジオパーク加盟地関係者、県外から長崎県への出向職員、学術経験者）
調査目的	島原半島外の人達を対象に、島原半島のイメージや、島原半島の魅力を高めるための意見・アイデア・要望、アドバイスを把握し、今後の連携やビジョンづくりの参考とする。

■回収状況

- ・回収数 33 票（回収率 73.3%）

■回答者の属性

- ・エージェント、広告代理店、新聞記者、都市計画の専門家、研究者、他の半島地域の行政職員、長崎県への出向職員等
- ・男性：25名、女性：8名
- ・20～30代：17名、40～50代：14名、60代以上：2名
- ・県内居住者（県外出身者・大学教授など）：26名、北海道1名、新潟県1名、東京都3名、福岡県：1名、高知県：1名
- ・島原半島に住んでいる（いた）：14名（42%）、毎月もしくは年に何度か訪れている：11名（33%）
- ・島原半島を訪れる（住んでいる）目的は、「仕事や研究」が29名（88%）、旅行やレクリエーションが14名（42%）である（複数回答）。

■回答のまとめ

- ・他の地域と比べての**島原半島の印象**は、「最も半島らしい地域」で「豊富な魅力がある」ものの、「PR不足」、「半島としての一体感はあまり感じられない」との評価もみられるほか、「交通の便、移動の便が悪い」という印象を強く持たれている。また、「若者が遊べる場所が少ない」、「若者と年配者のビジョンの違いが顕著」という印象を持たれている。
- ・関東方面の方には「イメージが沸かない」という人もみられる。
- ・一方で、「畜産物や野菜などの食物が豊か」、「農業が盛ん」、「水がおいしい」など豊かさを印象として強く持っている方が全体の3分の1近くおり、「半島全体が明るくて元気なイメージ」、「おせっかいなくらい親切」、「人情味があり温かい」といった人や雰囲気の良い、「変化に富む地形、自然、動植物」、「温泉」、「県内有数の観光地」、「特異な自然・歴史・文化」など多様な資源を有する地域といった印象を持たれている。
- ・**島原半島の魅力**は、「海・山・川・里があり日本の地形を凝縮した場所」、「小さいエリアで季節の変化を体感できる」、「半島全体が世界ジオパーク」、「豊かで身近な自然、景観、火山資源、特産物、湧水、歴史」、「雲仙温泉と周辺の自然美」、「熊本市と長崎市を結ぶ中間地点」、「温泉観光&棚田などの農業観光地」、「自然の恵みから生活、生業が色濃く残る」、「スローライフをエンジョイできる」などいろいろなものがコンパクトにまとまった地域で、自然や火山、それに由来する歴史や文化など多様な資源とライフスタイルがある点に高い評価が得られた。

・島原半島の魅力、資源を活かすための方法等については、次のような提案がみられた。

- ①ジオとの連携：自然資源を全面に出したジオさらくの取組、農業・漁業の体験プランとジオパークの連携
- ②資源を活用した新たなツーリズム：自然と風景を売りにしたレジャーアイランド、観光経済で自然文化資源を守る半島の新しい観光、地域の暮らしがみえる観光、ローカルツーリズムの推進
- ③定常型社会の創造：色濃く残る技術や伝統を守ることで独自の地域開発を進め、持続・継続できる「定常型社会」を目指す
- ④PR活動：雲仙ブランドや雲仙の魅力の周知活動、積極的宣伝活動・知名度向上、半島内のあちこちで個別に活動している団体等を発掘・紹介し連携してPR活動、国立公園PRイベントの定期的実施、島原半島の情報窓口の設置
- ⑤教育：半島の一体化に向けた意識醸成、小・中学校時からの郷土教育
- ⑥実行・継続体制づくり：半島全体が一度まとまってなにかをやってみること、プランを実行するという意思と継続するチームづくり、PDCAの導入
- ⑦交通機関の整備・充実

7) B-⑦島原半島での修学旅行受入れ可能性について

ヒアリング先 社団法人長崎県観光連盟専務理事 土井正隆氏

ヒアリング日 平成23年12月2日(金)

○長崎県における中学校、高校の修学旅行の傾向と島原半島の受け入れ先としての評価

- ・ 修学旅行のトレンドは、平和教育や民泊して農業や漁業などを体験する体験型の学習・教育旅行。長崎県を修学旅行で訪れる中学校や高校の多くは、長崎県、熊本県、福岡県と複数県を周遊する。
- ・ 長崎県では、平和教育として長崎市、民泊を実施している小値賀島や南島原市は注目される要素を持っている。
- ・ また島原半島は世界ジオパークに認定されており、ジオサイトでの体験などを通じて地域の成り立ちや環境問題などを学習できることから、修学旅行においては魅力的な地域である。
- ・ 東日本大震災後、地球科学を学ぶことのできるジオパークや自然エネルギーともいえる地熱をテーマにできる島原半島は、修学旅行先としての価値をより高めることができるといえる。

○雲仙地域への修学旅行生の誘客について

- ・ 一方、こうした修学旅行において旅館やホテルは単に宿泊するための場所であり、旅館やホテルに泊まることを目的にすることは少ないため、今の状態の雲仙温泉では修学旅行の候補地には成り難いといえる。
- ・ 雲仙の旅館、ホテルに修学旅行を誘致する場合には、まず、地熱を活かした体験学習やジオサイトである普賢岳をテーマにした体験学習などのプログラムを充実させることが必要である。しかしそれだけでは、通過型になってしまうことも考えられるので、雲仙の旅館やホテルがプログラムと連携して宿泊を伴うかたちでのプランをつくる必要がある。
- ・ ただ、島原半島全体で考えた時に、果たして雲仙温泉を修学旅行生の宿泊先にするのが良いのか疑問が残る。まずは、島原半島として修学旅行生に何を提供するのか、各地域がどのような役割を果たすのか、ランドデザインを描くことが重要である。